

カッコいいだけじゃ伝わんねえし、それだけで終わってしまう プラス何かがないと響かないと思った

たっ作曲者が軸になっていろいろ作業をして、構成が増えたり減ったり、そこにああでもないこうでもないメンバーとプロデューサーも入って作っていくんです。そのまんまのときもあれば、まったく変わるときもあります。たとえばラストの「忘れたいつかの…」は、原曲とはサビのコード進行も変わってますね。

－「忘れたいつかの日。」の原曲を作られたのはマナブさんですね。

マナブ：これはキーも最初半音高くて、でも鉄の色に合わせて下げようかな、じゃあ1オクターブ下で歌ってもらうかな、とか。それでサビのメロイはそのままコードは変えてみようかなとやってみて、で、コードを変えてみたらまたメロを変えてみようかな……とか。すげえ二転三転して、でもやりたようにはやらせてもらったんで。

和己：結果はね？
マナブ：それまではプロデューサーを含めてバトルの日々でした（笑）。
和己：（自分が）その仲介に入って「いや、こっちの方がいいと思いますよ？」と言ったり（笑）。
作曲者とプロデューサーのバトルは多かったですね。いい意味で。プロデューサーはやわらかい人なんですけど、厳しい人なら「降りる！」と言われても仕方がないくらい、それくらいのレベルの会話をしてますね。

－この曲はメロウでこのアルバムでは異質に響いて、ラストの到達感にぴったりですね。今回はラウドでヘヴィでダークなものが追求されているけど、それと同じくらい歌メロが際立っていてキャッチーたというのも特徴的だと思うんです。そういうバランスはとてもMARILYN MANSONに近いものがあるな。

和己：それは嬉しいですね。激しいだけの曲をやりたいわけでもないし、そんなのライブでもやりたくない。そういうのはやっても聴いても面白くない。キャッチーな部分がないと自分から教えない。そのバランスがうまく取れるのと言ってもらえるのは、作って良かったなと思いますね。和己：根本的にSCREWの中にあるものですね。それは、これまでの曲もそうやって作ってきましたし。

－今回はそれがより研ぎ澄まされるとと思います。それに加えアレンジにも遊びというか、ユーモアが効いてますよね。たとえばTrack.3「Burst Forth」は高速バストラが効いたメタル的な楽曲だけど、途中にジャズのパートが盛り込まれていたり、通常盤のみに収録されている「オブセッション」には夢が入っていました。

和己：これは原曲を作ったルイのアイデアです。あいつは結構狂ってるところがあるんで（笑）。発想力の豊かさというか……。私生活から天然なんで、そういう人が作る特別な何かがあるんだと思うんです。和己：SCREWは構成がいきなり変わる曲があるんで、だから自然と僕らにも入ってきました。ルイの頭のおかしさが曲にいい形で反映されてると思いますね。ルイの頭のおかしさが。

－やたらとルイさんの頭のおかしさを強調しますね（笑）。

和己：大事なことなので2回言っておかないと（笑）。実際のジャズバンドのかたに弾いてもらって、等は先導で元Kagrraの真さんが弾いてくださった。そういう本物の音が入って、曲の印象がだいぶ変わりましたね。
和己：だからライブでは僕が弾こうかって。

－え（笑）！

和己：俺もね、ギターの上にトランペットは用意しとかない！
和己：トランペットの代わりにリコーダー……。

－ははは、新さんがリコーダーって想像つかないです（笑）。ところで「mellow」は爽やかさと切なさが入るギター・ロック・テイストの曲で、最初は驚きましたがいい曲ですね。

和己：これも選曲会で物語を讀ましたんです。でも俺は聴いた瞬間に「あ、いいね！」と思って、ゴリ押しして「入りたい」と、そして新さんが歌詞乗せてくれて、歌聴いたら更に「いいね！」って（笑）。プロデューサーとずっとそう話しましたね。

－しら聴こえるのがマナブさんのギターで、Rから聴こえるのが和己さんのギターでしょうか。おふたりのギター之音も同じものを遊んでいるようですが、それぞれの指先で奏でている人となりや明確に感じられる音になっていると思いました。あと、SCREWではあまりないギターのアンプで弾くんですね。

和己：これは原曲でルイがギターを打ち込んできたので、それをもとにやりましたね。打ち込みはずっと音が正確で、それになるべく近づけられるような生のギター之音にしてみました。マナブ：打ち込みのギターがすごく良くて、僕はルイくんが持ってきたという音がすごく好きなんですよね。だからその音を指したように弾いたんですけど、難しくかったですね（笑）。ルイ：僕は俗に言うヴィジュアル系っぽいものを作るのがあんまり得意ではなくて、普段聴く音楽も多少少々方向性なので、普段自分が見つけているものをSCREWっぽくして持っていくんですけど……頭おかしいんですかね（笑）。

－（笑）今回は通常盤のみに収録の「THE ETERNAL FLAME」も含め、全編英語詞の曲が3曲あります。特に「Evil passions」のウォーカルは今までの新さんの声とは違うニュアンスもあって新しいと思いました。

和己：スタッフと話して英語にするか日本語にするか決めるんですけど、この曲は誰も英語がいいいなと。英語だと日本語より一層意を遣いますね。日本語は発しただけで意味がわかるけど、英



語はしっかりと頭の中に入れ込むのが大変な作業で、でもちゃんと意味はわかった上で歌いたいから、歌って「この言葉（の意味）なんだっけな？」ってならないようにしたいけどないし、それと同時に英語の場合は、楽器になりきることできるかなと思っていて、感情を持っている分やりやすい楽器ですね。
和己：英語の発音うまくなったよね？
全員：（笑）
和己：最近助かるのが……パソコンにスピーチって機能があるじゃないですか、あれを何回も聴いて……。
和己：最近？結構前からある機能だよな（笑）？
和己：……うん、でもわりと最近知った（笑）。

－（笑）「絶望の讃美歌」は突風でいろんなものを吹き飛ばすようなポジティブなエネルギーが漲った曲ですね。ラスト3行の「ならば忘れたいように眠れなくらいに／俺が悪夢を喰おう／絶望の讃美歌を」という歌詞の説得力も大きいようです。

和己：絶望というものを視点を変えて見て、絶望を讃えて歌ってみようかなと思ったんです。俺らはポジティブなことを歌うバンドでもないし、俺はそういう人間でもないの、もういっそのこと絶望のなかで生きていこうって。

－でもそれって、とてもポジティブなことですね。享受するという。

和己：そうですね。希望を持って絶望を歌っている。それはアルバム全部通してもそうで、それを理解してもらえと嬉しいですね。
マナブ：（新は歌詞で）昔に比べると難しい言葉を使わなくなったと思います。俺は歌詞を書かないのだからないですけど、大人になるとそうなっていくのかな、なんて思ったりもしますね。
和己：……昔はかっこつけて難しげな言葉を並べたっけってか、言いたいことないけど……。核心に触れなくというか、インタビューとかでも深く言わず、自分だけが内容を知ってる……そういう傾向があったとは思いますが、でもそれだと伝わらないですね。

－伝わる歌詞というのは大事だと。

和己：楽曲が増えて、100曲以上あると、さすがにしんどくなってくれないですか。「この内容も言ったしな」みたいな。そういう状況になってきた中で、伝わらないのってうなの？と思うようになったんです。どうせ苦労して書いてるんだっけら、ひとりで多くのの人に伝わったほうがいい。そういう感情の変化は自分の中で知らず知らず起きているかな。インタビューで言わなくても、この先インタビューがなくなると、歌詞を並べた自分と自分と考えは何かを言っているのかわかる。そういう歌詞になってきたかなと思います。さっぱりわかりません！だと書いた意味もないし、ただの自己満かなと思っし。それが自分の意図でない伝わらたとしても「そういう受け取りかもあるんだ」と。そういうところでもファンとの距離が縮まった感じがします。そういうレスポンスが昔よりも増えているので、伝わってるのかな……と思いますね。

－それが英語詞にもあると思います。難しい言葉があまりないのも理由のひとつですけど、それは新さんがちゃんと意味を噛み締めて歌ってらっしゃるから成り立つことですね。

和己：俺も英語を訳して歌詞を知りたいなと思って、そういうファンの子もいるので。そういうときは「お、わかってるじゃんこいつ！」と思いますね（笑）。

－（笑）そういうことも含めてこのアルバムはライブでどんな景色が見えるのか、とても期待が高まる音価になっていると思います。リスナーのイマジネーションを刺激してくれます。

和己：これらがちゃんと俺らが広げて、困ってきます。ルイ：「Burst Forth」のジャズの部分はどうしようかなと思って……アップライト（ベース）とか使ったほうがいいのかな？
和己：ドラムとベースにはそこを頑張ってもらって、で、俺は（※と言って新とふたりでトランペットを吹く仕事を）する。

－ははは！全国ツアー「INNER PSYCHOLOGICAL WORLD」はまず全国16ヶ所を回って、その後は渋谷のライヴハウスを8ヶ所回り、ファイナルは日本で初のホール・ワンマンとなる渋谷AiiA Theater Tokyoという、またまた壮大なプランです。

和己：8周年ということで渋谷で8本やって、ファイナルのAiiA Theaterは9周年目に向けて、という意味合いで、9周年に向かって頑張ってきたいなって。ジン：今回のアルバムはより世界観が出せる楽曲がいっぱいあると思うので、そこにどっぶり浸かれるようなファイナル……ああ、楽しかった！だけではない何かがあればいいなと思っています。ホール・ワンマンは海外ではしかやってきたことがないので未知な部分はありますけど、楽しみますね。

マナブ：本数もすごく多いので、最後のほうは曲も全部馴染んでるだろうし、どうなるのか楽しみですね。ルイ：何ひとつ残さずし出し切れればいいかな、と思っています。
和己：ツアーが進んでいくにつれて、みんながより一層痛んでくれたらいいなと思います。そっのほうで歌詞が伝わらないと思うし。

－ジンさんがのおっしゃる「楽しかっただけではない何か」に繋がりますね。

和己：楽しいことは大前提だと思うんですよ、その先の内容的な部分ですね。

－インタビューの続きは
[激ロックウェブサイトをチェック!!](http://gekirock.com) >> **GEKIROCK.COM**

SCREW 「PSYCHO MONSTERS」

【通常盤】
2014.8.20 ON SALE!!
左：【初回限定盤A】CD+DVD
TKCA-74122 ¥3,796 (税別)
右：【初回限定盤B】CD+DVD
TKCA-74123 ¥6,296 (税別)
【通常盤】
TKCA-74127 ¥3,000 (税別)
GENRE：LOUDROCK、SHOCK ROCK
FOR FANS OF：Lynch、藤原たけお、MARILYN MANSON

昨年日本のバンド名を冠したメジャー・デビュー・アルバムをリリースしたSCREWのメジャー・デビューとなるフル・アルバムは、選んだ音を一切感せずな興味で強顔なラウドロックの広謙だ。自身の美学を追求し求めた前作に比べ、5人の肉体や精神を至近距離で感じられる生々しさで、動き手の腕に刺さる刃に迫る。ヘヴィかつダークな曲世界で、時には突き動かし、時には抱き込み、と思えば突如現にジャジーなパートを入れ込むなど、音の隙間にちらつく遊び心や人間味。これは間違いなく聴き手とのコミュニケーションの所望だ。これまでも後ら積み上げてきたものが、今作でもの見事に固まった。このメンバーたちがどうライブ会場で暴れまわるのが、期待が高まる。 沖 やまこ



ラウドロック×エレクトロを突き詰めたシングル2枚を経て辿り着いた ヘヴィでキャッチー且つパワフルな“化物物”揃いのニュー・アルバム

和己 (Vo) 和己 (Gt) マナブ (Gt) ルイ (Ba) ジン (Dr)
インタビューー 沖 やまこ

－まず、4月20日に赤坂BLITZで開催された、結成30周年記念ライブ「SCREW 30th Anniversary Live NEVERENDING BREATH AT AKASAKA BLITZ」は皆さんにとってどんな1日になりましたか？

和己：最後の映像が映し出されないという機材トラブルもあったので、改めてライブは生ものなんだなと思いました。だからそういうトラブルもきっちり対応できれば良かったな。チーム全体で大切なことをやっていたら、楽しんでもらえてたらいいなと、バンドのチャレンジみたいなもの、その気持ちで強く感じられたライブになりました。個人的には守りというよりは攻めのライブができたかなと思っていますね。

和己：最後の映像が映し出されないという機材トラブルもあったので、改めてライブは生ものなんだなと思いました。だからそういうトラブルもきっちり対応できれば良かったな。チーム全体で大切なことをやっていたら、楽しんでもらえてたらいいなと、バンドのチャレンジみたいなもの、その気持ちで強く感じられたライブになりました。個人的には守りというよりは攻めのライブができたかなと思っていますね。

マナブ：周年ライブなのでセットリストもベスト盤みたいな感じで新旧織り交せて、ファンの人を楽しんでくれることをやったりなので、楽しんでもらえてたらいいなと、バンドのチャレンジみたいなものは、このアルバムもツアーも楽しめるかなと思っています。あいつのライブは毎年やっていたんですね。自分のやったことと1番わかりやすい形でも自分自身にも見えるかなと思っています。

－ありがとうございます。その8周年ライブでリリースが発表された、メジャー2ndアルバム「PSYCHO MONSTERS」は、前作「SCREW」以降にリリースしたシングル「CAVALCADE」「FUGLY」の世界観を掘り下げた、パワフルでガッツと来る作品だと思います。これまでの集大成的なところを感じさせたアルバムの「SCREW」から大きく踏み出す、ネクスト・ステージの作品だと感じています。

和己：前作は「SCREW」というタイトルで、そのワードがある以上どうしても……かっこつけなきゃいけないじゃないですか（笑）。

－（笑）バンド名を冠してますからね。

和己：かっこいいところは見せられないので、だからかっこよさを追求して作ったんですけど、かっこいいだけじゃ伝わんねえし、それだけで終わってしまう。プラス何かがないと響かないと思ったんですね。だから今回はそれに色をつけて、幅広く。それは今までやってきたことでもありますが、その強みをより一層強く生かした作品になったかなと思います。「PSYCHO MONSTERS」

－「PSYCHO MONSTERS」という言葉のもとに完成した楽曲群なんですね。いつごろ出してきた言葉だったんですか？

和己：これが早かったですね。今年の1月か2月にはもう、もともとこのワードをいつか使いたいというの自分があったので。

－では作曲者の皆さんはそのワードに向かって楽曲制作をなさったと、このワードを受けて皆さんはどう思われましたか？

和己：「化物物」ですね（笑）。
全員：（笑）
和己：前作よりは乱れる感じというか、大人しい感じではないなというのは弊にあったので、前作にはない勢いのある楽しい曲が入っています。あとタイトルコンセプトだけではなく、喜怒哀楽というか、世の中の感情的なものを入りたいなというののひとつのコンセプトでした。かっこいいものだけを追求すると似たり寄ったりにもなるので、そこはヴァリエーションを意識して、それがアルバム全体を流して取り扱われたのなと思います。

和己：ここで経験して感じることもなんですけど、SCREWというバンドで作品を作るとなると、楽曲（のカラー）まで統一させるのは至難の業と思う方が、すごく努力を費やすことだと思っいて、だからポップにも聴こえるものもあれば、かと思えば狂った怪物みたいな、どうい曲が来ても構わちゃうワードをあえて送ったんです。

－受け取り手によって解釈が変わるものは、可能性が広がりますよね。

和己：話はすごく単純なんです。前作の「SCREW」で「これがSCREWだ」というのをその当分みんな出し尽くしたと思うんですけど、それで今回の「PSYCHO MONSTERS」というワードで、楽曲の広がりとかが容易に想像できると思うんです。キャッチーにも捉えられるし、アメリカのコミック・タイトルみたいな印象にも捉えられるし、ちょっと怖いものにも捉えられるし。選曲会のように「この曲はどんなだろう？」とディスカッションしたりもしたんです。でもそれと（このような解釈が）あるんだ、アルバムタイトルだからこそできるんだよね、だからこれはやってみようという曲もあったりして、みんな「怪物たち」を曲に書き換えてるんです。

－SCREWは新さん以外のメンバーさんが原曲のデモを制作されるんですね。でもどの曲も作曲者はSCREWとバンド名になっている。素料も疑問なのですが、デモとはどくら変わるのでしょうか？

和己：全然違いますよ。デモは基本ワン・コースラスなので、そこからフル・コースラスを作るにあ